

日本水フオーラム  
事務局長  
**竹村公太郎**  
*Kotaro Takemura*



# 近代の克服、ポスト近代へ —再び流域循環社会へ—

## 日本社会の課題

本年七月十五日、全国知事会が佐賀県唐津市で開催され、全国知事会としては異例な人口減少に関する非常事態宣言を発した。その日、私は秋田において、秋田魁新報の一面に大きく掲載されたその記事を読んだ。

日本の課題は「地方の激しい過疎化」である。それは都市集中、特に「東京圏への一極集中」によつてもたらされた。問題は日本の人口減少ではない。都市圏、特に東京の異常な膨張と、国土の大半を占める地方部の萎縮が問題である。

現在、二十一世紀の近代文明の頂点において、

日本の国土の異常な不均一化が一気に顕在化した。近代を走り抜いてきた日本が、ポスト近代に向かうために克服しなければならない最大の課題はこのいびつな国土の姿となる。いったい、近代とは何だったのか？ ポスト近代とはどこに向かうのか？

この答えは、やはり歴史の中にある。

## プレ近代、それは、江戸の流域社会

工業を営んだ。外部から資源は流入しなかつたので、人間や家畜の排泄物を肥料とし、流域の中で物を再利用する循環社会を確立していった。

世界史の中でも特筆される、地方に権力が分立した封建社会が極東の島国で誕生した。それは言い換えると、流域に封じられた流域封建社会であった。

## 近代、それは流域社会の崩壊

十九世紀、欧米列国が日本に迫った。日本は植民地にされるか、帝国になるかの選択を迫られた。日本は帝国の道を選択した。富の集積がなく、近代技術で遅れていた日本は、一刻も早く欧米列国に追いつかなければならなかつた。

そのためには、地方に権力が林立し、地方に富が分散している封建社会から、中央に権限と富を集中させた国民国家へ脱皮しなければならなかつた。地方封建から中央集権への脱皮は、明治新政府にとつて最大の政治課題となつた。

日本の封建社会は根深かつた。何しろ流域に即した地方権力は自然であり、流域にこもつた人々の住まい方も自然であつた。流域主義の封建社会を覆すのは、並大抵の力では達成できなかつた。これを思ひぬ方法で実現したインフラが登場した。蒸気機関車であつた。

明治五年、新橋と横浜の間を蒸気機関車が走

断され孤立している。

十七世紀初頭、約一〇〇年続いた戦国時代が終わり、平和が訪れた。それを実現した徳川家康は戦国大名を治めるため、日本列島の地形を利用する工夫を凝らした。それは、大名を各域に封じたのだ。大名たちは膨張せず、尾根を越えさせなければ、流域内で絶対の権力を与えられた。流域内で洪水を防ぎ、干拓をして、川から水を引き、農地を開発した。

この頃、世界は大航海時代に入つて、日本は海外へ膨張しなかつた。人々は流域内で国土開発に力を注ぎ、流域の自然の恵みを最大限に享受する林業、農業、水産業そして家内手

つた。蒸気機関車は新橋～横浜間をたつた一時間で結び、行き来の障害だつた多摩川や鶴見川をあっけなく越えてしまつた。

明治二十四年には青森までの東北線が開通した。鉄道開業からわずか三〇年余りで、鉄道網は北海道から九州まで七、〇〇〇キロメートルを突破した。

その全ての鉄道網は、流域を横断して東京を目指していた。江戸の封建社会を支えていた流域は、鉄道によって横に串刺しにされた。東京に向かう汽車を見た人々は、自分自身を流域に閉じこめておく時代は終わつたことを悟つた。地方の人々は鉄道に飛び乗つた。人材と富は東京へ、東京へと集中していった。

日本は流域での循環文明に別れを告げ、東京一極集中のエネルギー大量消費の膨張する近代文明に突入していった。

## 近代の限界とポスト近代

第二次世界大戦後、日本は中近東の余りある石油を利用して世界最先端の工業国家に躍り出ていった。二十世紀の後半、先進国は消費を謳歌し、新興国が台頭し、途上国のアジア・アフリカの人口は急増していった。

しかし、二十世紀末から二十一世紀に入ると、地球が悲鳴のような軋み音を上げ出したら。軋み音を見るため観光で訪れる。これがポスト近代の日本列島の姿となる。

地球資源を収奪する大量消費の近代文明は、持続可能でないことが明らかになつた。ポスト近代で、いかに持続可能な低炭素社会を構築していくかが課題となつてきた。

ポスト近代は、近代の真逆を考えると分かりやすい。すなわち、国土全体の流域の自然资源を永続的に享受する社会である。水力などの太陽エネルギーを利用し、暗い山林を再生し、大地を緑化し、海域の環境を再生させ、その自然の恩恵を受けていく社会である。

林業と農業と水産業を中心にして、全国の地方部は循環社会を構築し、大都市はその地方の努力に手を差し伸べる。都市と地方部がネットワークで結ばれ、日本列島は有機体のように生きていく。世界中の人々が、そのような日本の姿を見るため観光で訪れる。